

2部3章 世界の国々を調べよう

子どもらしい見方・感じ方を生かした「中国の調べ方」の試み

長野県飯田市立上村中学校 田中清一

課題解決的な「国調べ」単元は難しいが…

「地域の規模に応じた調査」は、その対象地域が身近な地域であっても、また都道府県であっても、国であっても、いわゆる課題解決的な要素を学習の中に組み込んで展開すること＝動態地誌的アプローチによる学習展開は難しいなあと、私はつねづね感じている。というのは、その地域の地域的特質を理解することと、その地域的特質を明らかにする方法の双方を身につけることを、子どもたちの問題意識をくみ上げながら課題をきめだし、その課題を追究し明らかにしていくという学習展開として構成することが、時間的にも方法的にも（私には）難しいということである。

しかし、子どもたちがそれぞれ、身を乗り出して追究しようとする学習を創りたい！と思えば、動態地誌的アプローチによる学習＝課題解決的な学習を行うに如くはなし、ということもわかりきった事実かもしれない。

そこで本稿では、中国を課題解決的な学習で追究した場合の授業構想を提案したい。その際、前提とする考え方は、

- ①「国調べ」学習で取り上げる国の数を2か国として追究時間を確保すること。
- ②子どもらしい発想や感じ方を大切にして課題を設定すること。
- ③単元全体が有機的な連関を持つこと。
- ④単元の最後には、子どもたちが「わたし

の考えを持つ」場面を位置づけること。の4点である。

「中国を調べる」の単元構想

◇単元の日標（計8時間）

「世界最大の人口」というキーワードを用いて、中国の国土・産業・現代的な課題について自分なりの予想に基づいて調査・追究することを通じて、中国の地域的特徴およびそれを明らかにするための視点・方法を理解することができる。

単元の展開・留意点など

(1) 中国について知っていること・中国のイメージなどを出し合い、追究のための観点をつかむ。

※ここでは、帝国書院発行の教科書に例示されている「自然」「人口」「農業」「工業」の4つの観点を中心に取り上げていく。

【1時間】

(2) 帝国書院発行の地図帳で、中国の自然的特徴（地形・気候）を読み取り、白地図上に地図化し、それを互いに見合うことで、共通の国土認識を持つ。

※西部・中央部・沿岸部の違いを共通認識として持ち、以後の追究の基盤とする。

【1時間】

(3) 統計資料から、中国が世界最大の人口を抱える国であることを知ったうえで、「人

口が多いことで有利なこと・問題なことってどんなことだと思う？」との問いに対して意見を出し合い、課題を決める。

その際、生徒が最初に出し合った調べる観点それぞれについて、「人口が多いことで有利・問題なこと」という角度づけを加えて追究する。 【1時間】

①「農業について、人口が多いことで有利・問題なことはどんなことか？」

【1時間】

②「工業について、人口が多いことで有利・問題なことはどんなことか？」

【1時間】

※①・②について、予想→調査・追究→まとめ→発表のサイクルで学習展開。

(4) NHKスペシャル「データマップ63億人の地図－中国豊かさへの模索－」を視聴する。 【1時間】

※補助資料NHKスペシャル「データマップ63億人の地図」プロジェクト編『経の地図帳』（2005年、アスコム）。なお、<http://gis.coe21.sfc.keio.ac.jp/> で番組で紹介されたデータマップがすべて見るができる。

(5) (4)でのVTR視聴を通じて、人口の多さと国土の大きさを生かした、急激な経済成長が、都市部と農村部との貧富の格差を拡大したこと知る。そのうえで中国の「これから」について、自分なりの展望と意見を小レポートにまとめ、発表しあう。

※発表の際、HPや書籍・配布資料の中から強い印象を受けたデータマップを1つないし2つ取り上げる。 【2時間】

この単元、1時間1時間をつなぐものは、人口が多いことで有利なこと・問題なことってどんなことだと思う？」という、子どもが発言しやすいであろう問いかけである。このような問いかけにより生徒たちは、その子な

りの見方・考え方をまずベースにして、自由に予想を出すことができるようになる。

また、「農業」「工業」の特徴を、「人口の多さがもたらすであろう有利さ・不便さ」という判断規準をもって角度づけて追究することができる＝動態地誌的アプローチが可能になる、という利点もある。さらに単元の終末に、自分なりの考えを持ち、それを共有しあう場面が持たれることで、それぞれの生徒の感じ方はもとより、中国に対する見方・考え方の評価もしやすくなる。



現代的な課題について自分の考えを持つ

「地域の規模に応じた調査」の学習は、端的にいえば「当該地域の地域的特色の理解と、追究方法の習得」という目的に帰するものである。したがって、皮肉なことではあるが、この学習は当初のもくろみとは逆に、事実認知＝知識理解の学習になりがちである（「地域的特色」も「追究方法」も、それぞれ内容「知」・方法「知」いう意味では、事実という「知識」であるから）。

しかし、こうしたところばかりに傾斜がかかれば、勢い地理学習は、当初めざしていた方向とは違う方向、つまりは批判していたはずの無味乾燥な地理学習に陥ることになる。

このことを防ぐ効果的な手段について、私は以下のような考えを持っている。それは、当該地域で起きている現実的な課題や問題について「わたしの考え」を持ち、発信しあい、子どもの感じ方をできるだけ大切に学習を組織すること、である。

たとえば、「中学生の地理 初訂版」p.104～105間の折りこみ7のページのスウォン(恩聡)さんの生活を読み取り、日本人である自分たちの生活との比較から、その共通点・相違

点を出しあう。その後、VTR「データマップ 63億人の地図－第8回中国 豊かさへの模索－」あるいはNHKの補助資料p.64～65で、寧夏回族自治区（中国内陸部）に住む小学校5年生姫叢梅ちゃんを取り巻く貧困の現実（家族の年収8000円、教科書代900円が払えないために、小学校を中退してしまった）を知り、中国の現状とこれからについての自分の考えをまとめる。

このとき、子どもたちは、中国に住む同じ年代の子どもたちが、かくも大きな格差の中に生活していることに、驚きや怒り、やるせなさを感じるだろう。

しかし一方で子どもたちは、経済的な豊かさを求めること自体、自分自身の体験からも否定はできないという事実思い至る。そして、レポートをまとめる中で悩むことになるだろう。さらに、日本社会でも問題になっている格差の問題を紹介することによって、中国における格差を考えることが、実は自分たちの国で進行している同様の問題を考えることにつながることに気づくはずである。

地理学習は、決して地理学者を育てるためにあるのではない。市井に生きる庶民が、世の中を、自分につながる「生きた」対象としていろいろな立ち位置から眺め、何かを感じ、つかみとり、望ましい世の中とは何かを考え、実行し「続ける力」をを培うことこそが、地理学習の存在目的であると考えられる。

中国の現代的な課題を考えるための資料
— 帝国書院教科書・地図帳・資料集・
補助資料から —

中国の抱える課題について、その事実を認

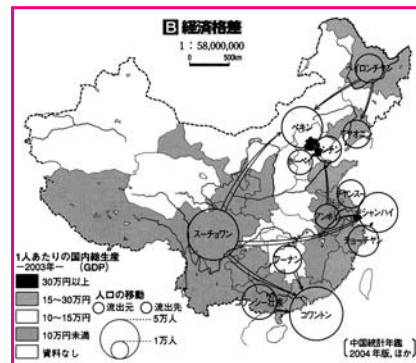
識したり、より考えを深めるために有効な資料が、帝国書院の教科書や地図帳（初訂版）・資料集には数多く掲載されている。

たとえば、『中学校スタンダード 地理・資料ワーク』のp.45にある、「西部大開発」に関するコラム、四川省と北京の景観写真、「都市別平均賃金と失業率」のグラフからは、中国国内の経済格差を、視覚的にもデータの的にもつかむことができる。加えて同書では、p.41の「都市戸籍と農村戸籍」のコラムから、都市部と農村部との経済格差が生じた原因を探ることができる。



「中学校スタンダード 地理・資料ワーク」 p.45

また、地図帳p.222の「**国**経済格差」の主題図からも、経済格差を空間的に分布として捉えることができ、単元初発に学習した、自然的条件との関わりの中で、経済格差の問題に迫ることが可能となる。



「中学校社会科地図 初訂版」 p.22